

それが赤、緑、黄、薔薇、樺といふ順序で段々に分れて發達するものであらうとウインチ氏は云つて居る、然し色名の發達が此の順序で發達するものだとしても、同様に知覺の順序がこれであると云ひ得ないので、感覺の順序に就いてはウインチ氏は別に二三年前から熱心な研究を重ねて居る、といふことであるから、其の結果が發表されると、感覺の方の順序に就いて又種々な發見があらうと思はれる、其の機を得て再び諸君の爲めに研究の資を供し度いと思ふ。(完)

村雨の名残涼しき夕風に

吹かれて名のる山ほとゝぎす (荷田在滿)

庭の面はまだかわかぬに夕立の

空さりげなく澄める月哉 (源頼政)

風吹けば蓮の浮葉に玉みへて

涼しくなりぬ日くらしの聲 (源俊賴)

園のをぐさ

後藤りん

○ 大人用の草履の片々ばかり落ちて居たのを拾ひ來りて

「先生々々、こゝに人間の草履が一つありました」 (五年男)

○ 象の話をする時、此の獸は何んでも喰べる時、鼻が手やお箸の代りをする。けれども象はおはなをたらさないから奇麗でいゝが、皆さんの様におはなをたらしては、汚くてお鼻で喰べることは出来ませんねえ、といふと、

「それだつて、いゝやあ、僕は象でないんだから」

(四年三月男)

○ ある日小春の唱歌をうたふ。その中に

とれとて赤きは柿よ

拾へと落つるは栗よ

樂しく小春

といふ處にて、一齊に拍手をさせたるに、

「や、可笑しいや。手をたゝけば拾つた栗が皆

おつこちて仕舞わあ」

(四年 男)

お日様やお月様の話をして、お月様はいつつ出るも

のかと問へば、「夜出るもの」と直ぐ答ふ。それで

は畫出るものは何でしようと思ふに、餘りに急で

思ひ浮ばぬか、皆合點のゆかぬ氣の顔して答へず

すると其の中の一人、黑板に ☆(日) ○(月)の

畫の描きあるを見て、

「畫出るのはお月様が破けて出るんです」

(四年三月 男)

此の頃はお部屋(保育室)の机の空がなくなつて
満員ですから、もう誰れが來ても這入ることは出

來ませんといひしに、

「それなら、今度誰れか來たら天井から草の紐を

さげて、それにつかまらせればよい、でしよう」

(五年 男)

○ 或る日薄紅梅の枝を澤山に貰ひて、早速各室の花

瓶へ分ち活けると、幼兒の一人、先生々々、こん

なに花を澤山どうするんですと聞く。すると傍に

居し幼兒の直ぐそれに答へて曰く。

「ねえ、先生、鶯に貸してやるんですねえ」

(六年 男)

○ 常に結膜炎にて眼を病める子、冬期休業後初めて

登園の時も何となく眼を赤くはらして居たれば、

お休み中に、お餅を澤山たべて遊んで許り居て、

眼を洗ふのを忘れたんでしよう、からかひしに、

「そうじゃない、あんまり御飯をこぼしたからさ」

△△さんの頬べたはふくれて居て、大層おいしそ
うですなえ、一つ喰べたいもんだ、といへば、
「お砂糖がついて居ないでもいゝこと」

(四年 男)

翌日又他の保母が同じことを繰り返かへして、お砂
糖なんかついて居ないでもいゝからといふに、
「……………今鹽をなめたばかり」 (右 同)

動物園ごつこをして、私は何に、誰れは何にと、
いろゝの獣になつて遊ぶ。一人の瘦せて背の高
き保母、「わたしも這入りましょう。何にして呉れ
ますかといひたるを、幼児つくぐ」と其保母の顔
を見て、暫く考へた末、
「先生は、おばけになればいゝ」

(四年十ヶ月 男)

草履の鼻緒に白い布のまきつけてあるを見出して

「あら先生、此の草履は怪我をしたんですか」
と問ふ。なせですかと問ひかへすと、
「でも綱帯してゐるではありませんか」

(五年四ヶ月 女)

日頃は至極く真面目な子である。或る日幼稚園の
運動場から本校の窓を熟視して居しが、
「やあ學生が澤山居ること、二匹も三匹も四匹も」

(五年三ヶ月 男)

奴胤の手技をしながら、「上れ」奴胤」と謔ひ初
め、
廻るゝ風車
風よふけゝ車がまわる、
あまり廻ると目がまわる」

と謔ひ終ると、

「先生、風車にも目があるの？」

(四年九ヶ月 男)

○ 散歩の歸り、馬が桶に首を突込んで秣草を喰べて居た。

「やあ、馬のお茶碗は大きいもんだなあ」

(五年二月月 男)

○ お辨當の時、一人の幼児が非常に御飯を急いで喰べて居た。そんなに急がないで、ゆつくり噛んでたべる方が、よいお兒なんですよといふと、
「いゝえ、あんまり遅くつてもいけないの、中位がいゝの、おつ母さんがそう言つたのよ」

(五年七月月 男)

○ 幼兒の手藝品に名前をつける必要ありて、保母が草書で奥村といふを書いた。すると其の子、暫くみつめ居しが、

「これは僕の字ではない、先生はうちのランプ(瓦斯燈のこと)を見てこないからいけないのだ」

(四年 男)

○ 入學期近く、もう五つ寝ると皆さんとお別れをしなければならぬから、寫眞を撮りましょう。その日はなるべく休まずにお出なさいといふしに、
「え、そうして忘れそうになつた時出して見ろんでしよう」

(六年二月月 男)

○ お節句のお祝ひとて、各組残らず一つになり、保母も皆幼兒と共に煎豆をたべた。
「あら、いゝことぬえ、先生も姉妹仲よしで、皆さんと同じだわねえ」

(五年四月月 女)

○ 雪の爲に幼稚園の藤棚が倒れた、翌朝其側を通つて来て、

「先生々々、僕今ね、地震のそばを通つて来たの」

(三年七月月 男)

雨の日、兄弟が揃ひの外套を着て歸る後姿を見て

「やあ、兄弟の様だなあ」

といふ故、さうですとも、△△さんの兄さんです

ものと言ひしに、

「嘘ですよ、今暗唾をしてたばかりだもの、兄弟

じやありませんからね」

(四年二ヶ月 男)

靖国神社の池のほとりにあるシダレ櫻を見て、

「先生、これはヨダレ櫻でしょう」

(五年九ヶ月 男)

保母の一人が下駄や草履の始末をして居るのを見

て、

「先生はお女中さんなの」

(三年七ヶ月 男)

誰れでも仲よくするのが良いお兄なの、まして同じ幼稚園に来ていらつしやるのですもの。幼稚園ばかりじやない。日本人は皆さん、又世界中の人

も皆さん仲よくしなくてはと話す、

「そんなら乞食でも」

(五年三ヶ月 男)

「泥棒でも」

(六年 男)

幼児を先生に、先生が生徒になつて幼稚園ごっこ

をする。君が代を唱ひましようとして△△のオルガ

ンで合唱した。皆の態度が大層上出来ゆへ後に

讚めると

「先生々々、わたしのオルガンの足が一番うまか

つたでしょう」

(五年九ヶ月 女)

二三人月謝を忘れて来た子があつたので注意する

と、

「あゝ亦忘れた、寝ると忘れるからいけない」

(五年十ヶ月 男)

保母がそれを聞きつけて、皆さんは肝腎な御用はお忘れなさるけれど、御飯をたべることが何故忘れなさらないのでしようといふと、

「それだつて、仕方がないや、生れた時から、そういう癖がついて居るのだもの」

(六年二月 男)

○ 戦争ごつこで野戦病院が出来た。看護婦の幼児が各病床を見舞ふ。やがて總指揮官の病床へ廻つて来た。其の大將に木綿の羽織のかけてあるを見て「アラ、えらい大將でいらつしやるのだから、絹のお羽織をかけて上げなければいけないのだは」

(五年十月 女)

○ 日比谷公園への遠足、保姆の手足から一人連れてゆく由を前から話して置いた。處が途中からいま一人加はることになつて、何時かあとからついて來るのを見出して、

「やあ先生が二人になつたから、西洋までもいけるなあ」

(六年 男)

入園したばかりに、貴方は菊枝ちゃんとおつしやのですかと顔をのぞいた。すると意外、
「あーら、いやな先生だこと、わたしは菊枝ちゃんじゃなくつてよ、菊枝さんだわ」

(四年十月 女)

○ 日が照つて居て雨がふる。△ちゃん窓から首を出して、

「あら、いやーだ、お天氣の雨がふつてる。おてんとう様随分老碌だわねー」

(五年三月 女)

かいる材料をかく多く集めるは容易ならぬ根氣であります併しその興味と有益は、そのお骨折りに充分酬めると思ひます。後藤さんの勞を多とすると共に、廣く諸方の方々からも此の種の材料を澤山寄せられんことを希望致します。その中に斯かる材料が如何に幼児研究上に用ゐられるかに就てお話し度いと思つて居ます。(編者)

保育の實際

○ 唱歌紹介

(甲賀ふじ子氏)

フレブル會夏期講習會に於て甲賀講師の教授せられたるものを誌上にも頂戴いたしました。(編者)